

うどんの味くらべ

岡内英夫

大平さんと私は、郷里と母校を同じうする間柄であつた。同じ香川県に生まれ同じ年代に高松高商に学んだ。その故もあつて以前より親しく交友をいただき、ゴルフやその他の会合でお目にかかる機会が多かつた。総理になられてからは、激務のためにそのような機会はだんだん少なくなつてしまつたが、それでもお目にかかつたときには、必ず大平さんの方から先に手を差し伸べて握手を求められ、親しく話しかけてくださった。

大平さんを囲む会に「大栄会」というのがあつた。築地の「栄家」に十数人の経済界の人達が集まつて、肩のこらない会合が毎月もたれていた。いつの頃からか、私もこの会に入れていただいたが、「栄家」の女将である和田栄子さんは大平さんを「お父さん、お父さん」と呼んでいて、普通の宴席で見ると堅苦しい雰囲気はみじんもなく、時折は大平さんの歌謡曲も聞くことができた。三越の松田社長さん、三井物産の若杉社長さん、キリンビールの高橋社長さん、安藤建設の三宅社長さんら大平さんと心を許して親しくお付き合いされていた方々が相次いで他界され、また和田栄子さんが亡くなられてからは、会場を六本木の「はん居」に移して続けられた。「大栄会」は故池田総理より受け継がれたと聞いている。私の知る限りでは大平さんはこの会に一度も欠席されたことはなく、政務や党務のことを忘れてよく召しあがり、たわいもない話に花を咲かせて帰って行かれた。大平さんのうどん好きは余りにも有名であるが、あるときこんなことがあつた。日本無線の幕内社長さんの郷里である水沢のうどんと、私の郷里である讃岐のうどんとどちらがおいしいかが、たまたま会合の席上話題と

なり、互いに張り合って譲らなかつた。そこで大平さんの動議によって、両方自慢のうどんを食べくらべた上で決めようではないかということになり、まず幕内さんが群馬からうどんの専門家をつれてきて、はん居の台所を借り受けて調製し、その次の月には私が讃岐うどんの専門家をつれてきて、同じくはん居の台所を借り受けて調製した。この味くらべは、大平さんの「両方とも甲乙つけがたい、引き分けにしよう」という判決で一応の決着がついたが、「大栄会」での話題は大体このようなもので、まことに和気あいあいたる会であつた。

大平さんにとっては、この会に出席することによって短時間ながら忙しさから解放され、頭を休めていただけたのではなかつたらうか。私たちもそのような気持で少しでもお役に立ちたいと念じていたが、総理になられてからは、料亭での会合は内容がどうであるかと他から批判を受けるおそれなしとしない、という大平さんの謙虚なお考えから、会場をホテルオークラに移し、しかも毎月でなく随時会合をもつようになつてしまつた。

大平さんには、このような思いもある。私は大平さんからゴルフのハンディを六つもらつて、勝つたり負けたりであつた。大蔵大臣ご在任の頃、たしか東京パーティクラブにお伴したときのことであつたと思う。その日は私は調子が悪く散々に負けてしまつた。パーティーの席上、私は他の仲間のとくと同じように「一打百円の割りでおそろおそろ差し出した。大平さんとは一打千円であることを重々承知の上でしたことであつたが、大平さんは「岡内さん、これは何ですか。大蔵大臣に預金しておく損はないですよ」というわけで、かつて経験したことのない巨額を献上してしまつた。その後これをなんとか引き出すべく努力したが、ついに大平さんは幽明境を異にしてしまつた。

虎の門病院にご入院中「岡内さんとゴルフをしたい」といわれていたと森田秘書官からうかがい、涙がこみ上げてくるのを禁じ得なかつた。わが郷土が生んだ偉大なる政治家大平さんは今はない。

(資生堂相談役)